［シアター・トピックス］

戦時下で舞台をつくるということ

ウクライナの３劇場ディレクターインタビュー

聞き手＝マリーナ・コテレネツ（ウクライナ作家連盟ディレクター）

ロシアのウクライナ侵攻からひと月もたたない2022年３月16日、マウリポリのドネツク州立アカデミック劇場（Donetsk Academic Regional Drama Theatre）がロシア軍の空爆にあい、多くの死者が出たという報道があった。破壊された劇場は、人々の避難場所になっていた。

ロシア演劇の研究者たちによってロシアの演劇人の声がネット上で共有される一方、ウクライナの演劇人たちの状況はなかなか見えてこない。

国際演劇協会日本センターは、「紛争地域から生まれた演劇」のプロジェクトで繋がりができたキーウの「ウクライナ作家連盟」に、現地の劇場に取材できないか相談をもちかけた。ディレクターのマリーナ・コテレネツ氏は、戦況の異なる３つの地域の３つの劇場の代表に、電話、あるいは対面で、自らインタビューを行うことを提案してくれた。

侵攻当日の劇場に起こったこと、戦時下でクリエイションを行うということ、そして劇場のこれからについて、コテレネツ氏によるインタビューを記録する。

助け合う劇場

レーシャ・ウクラインカ記念国立アカデミック・ドラマ劇場

Lesya Ukrainka National Academic Drama Theatre

キーウ市

https://lesyatheatre.com.ua/

レーシャ・ウクラインカ記念国立アカデミック・ドラマ劇場は、ウクライナでもっとも大きな演劇専用劇場のひとつだ。公式な歴史は、1926年にキーウ自治区の執行委員会の決定により「ロシア国立劇場（State Russian Drama Theatre）」が組織されたことに始まるとされている。だが、劇場の歴史は19世紀にまで遡ることができる。1891年、傑出した俳優で演出家のニコライ・ソロフツォフ（Nikolai Solovtsov）が、ロシア演劇の常設劇場「ソロフツォフ劇場（Solovtsov Theater）」をキーウに設立したのが始まりだ。現在の劇場は、当時と同じ建物で運営されている。

1941年には、ウクライナを代表する詩人・劇作家、レーシャ・ウクラインカ（Lesya Ukrainka、1871～1913）の名を冠する名称に変更された。この25年は、ミハイル・レズニコヴィッチ（Mikhail Reznikovich）が劇場を率いてきた（1994～2022）。ウクライナ国内では最古参の権威ある演出家の一人で、旧ソ連で高名だった演出家、演劇教師、演劇理論家のゲオルギー・トフストノーゴフ（Georgy Tovstonogov、1915～1989）の教え子であり後継者だ。

レーシャ・ウクラインカ記念国立アカデミック・ロシア・ドラマ劇場―― 本劇場は最近までこう名乗っており、設立以来ずっとロシア語で活動を行ってきた。公演のためにロシア人演出家を招聘し、レパートリーには常にチェーホフ、オストロフスキー、ブルガーコフなどロシアの古典や現代劇作家の作品が含まれていた。だが2022年3月、ロシア連邦のウクライナ領内への全面侵攻の後、本劇場は劇場名から「ロシア」を外して、レーシャ・ウクラインカ記念国立アカデミック・ドラマ劇場と改名した。

現劇場監督のクルロ・カシュリコフは2014年のシェイクスピアの翻案作品『ジュリエットとロミオ（Juliet and Romeo）』演出以来、演出家として精力的に活動してきた。2016年にはアーサー・

『ジュリエットとロミオ』

ミラーの『橋からのながめ（View from the Bridge）』を、2018年にはサイモン・スティーヴンス（Simon Stephens）の『夜中に犬に起こった奇妙な事件（The Curious Incident of the Dog in the Night-Time）』を手がけた。その後も、マーティン・マクドナー（Martin McDonagh）の『イニシュマン島のビリー（The Cripple of Inishmaan）』（2020）やブライアン・フリール（Brian Friel）の『トランスレーションズ（Translations）』（2022）など、アイルランド人劇作家の作品を演出している。2月24日にはジェズ・バターワース（Jez Butterworth）の同名戯曲をベースにした『フェリーマン（The Ferryman）』が完成し、劇場の大ホールでのリハーサルが予定されていた。だが上演は延期を余儀なくされた。

『夜中に犬に起こった奇妙な事件』

『イニシュマン島のビリー』

クルロ・カシュリコフ
Kyrylo Kashlikov

レーシャ・ウクライン カ記念
国立アカデミック・ドラマ劇場
劇場監督・俳優・演出家

取材日＝2022年10月10日

２月24日

戦争が始まると、ウクライナ文化情報政策省からひとつの命令が発出されました。ウクライナ国内の劇場での上演活動は停止となり、全従業員は給与の３分の２を支給されたうえで、リモートでの仕事に移行することを余儀なくされたのです。私たちの劇場のメンバーの何人もがキーウ、あるいはウクライナを去りました。また領土防衛に登録し、その後、前線に赴いた者もいます。

キーウはからっぽになってしまいました……。

私の家族はどこにも行きたがらず、私も自分の劇場から離れたくありませんでした。そこで、妻と娘は私と一緒に劇場で暮らすことにしました。何人かの俳優たちも家族と一緒に劇場に住みはじめました。彼らの家は戦略拠点に隣接しており、ミサイルの標的になっていたからです。

すでに３月に入って数日経ったころには、文化省は傘下の全機関・組織と連絡を取り合い、報告を送り、情報交換もできていました。2020年６月４日、ウクライナの文化情報政策大臣を務めているオレクサンドル・トカチェンコ大臣は、敵襲があっても少なくともキーウにあるいくつかの劇場を開けることは可能かどうか、情勢分析を始めました。

キーウに留まっていた私と同僚たちは、行動しなければという思いに駆られました。最も重要な目安、つまり安全性の面から見て、私たちの劇場はそれに相当するキーウで唯一の劇場だったからです。また劇場の入口がちょうど地下鉄へ降りる階段の真ん前に位置していたので、新たに耐爆シェルターを設置する必要もありませんでした。空襲警報が鳴っても、ドアを開け放てば２～６分以内に観客は地下鉄の構内に逃げ込めるわけです。文化大臣は実際に劇場に足を運んで、空襲時の我々のチーム対応が効果的かどうか確認しました。

そして2022年４月９日、開戦後初の公演として、小ホール（129席）でレーシャ・ウクライン カ生誕150年と劇場の落成80周年を記念した『三つの愛（Tri Kokhannya）』を上演しま

開戦後の初公演『三つの愛』は満席だった。

した。劇場は満席で、みんな泣いていました――観客も俳優も。

それからトカチェンコ大臣は子ども向けの公演を依頼してきました。4月中旬までに、私たちは子どもたちのための公演の準備を整えました。たくさんのお客さんがやってきました――お父さん、お母さんやおばあちゃんに連れられた子どもたちが。こんなに多くの子どもたちがまだキーウに残っていたとは思ってもいませんでした。劇場のホールで5～6歳の小さな子どもたちが遊び回り、絨毯の上を這い回っているのを見て、気がついたら私は泣き出していました。

劇場と戦争

戦時下では劇場の使命が変わったことを自覚しました。2022年の3～4月はマクドナーの思想を繰り返し思い浮かべていました。彼の作品の登場人物の一人は、信じているのです。人は奈落の底に立たされた時こそ、自分自身が人間であることを思い出すはずだと。

4月には街中のみんなが私たちの公演に来てくれました（その頃、キーフの住民は半分になっていましたが）。これは恐怖と危機に対するみんなの抵抗の意志を示していました。みんなひと時でも、何もかも忘れたくて劇場に来たのです。しかし一番大切なことは、繋がり、絆を確かめ合うことでした。演劇ほど相互の一体感をもたらしてくれる芸術はありません。劇場では、俳優も観客も、みんなが一体になります。時にはこのすべてが世界の終わりを描いた黙示録的映画、ただ肩を寄せ合って座っているためだけに人々が集まってくる、そんな映画のワンシーンのようにも思えました。こうして4月には、劇場はみんなが集う場となっていたのです。

まだ劇場活動を万全には再開できなかったので（多くの俳優が去り、演目のウクライナ語への翻訳もできていませんでした）、私は「我らウクライナ人」と名付けた企画を提案しました。進行中の軍事情勢への鋭い洞察を語るテクストを含む、ウクライナ人劇作家の時局を扱った作品のリーディングを開催したのです。

私はキーウに残っている演劇人たちに私たちの劇場を使ってくれるようSNSで呼びかけました。そして小ホールで複数の自主企画が始まりました。ささやかではありますが、私たちな

りの演劇人たちへの支援です。稼げるお金はわずかですが、それで何とか生きていければと思いました。また私たちと同じような大劇場、イヴァン・フランコ・キーウ国立ウクライナ劇場（Ivan Franko Kyiv National Ukrainian Theater）に、舞台を貸したりもしました。彼らの大きく美しい劇場は官公庁街にあるため、砲撃やロケット弾が直撃する恐れがあり、まともな運営ができなかったからです。10月には彼らも本拠地へ戻りましたが、私たちレーシャ・ウクラインカ劇場は戦時下を通じて週5日稼働の体制を続けました。イヴァン・フランコ劇場が2日間舞台を使い、私たちも2日間使い、残り1日は自主企画の公演が行われました。

また、しばらくするとミコラ・クリーシュ記念ヘルソン州アカデミック劇場（Mykola Kulish Kherson Regional Academic Music and Drama Theater）の俳優や演出家たちが、劇場の本拠地、ロシア軍に占拠されたウクライナ南部のヘルソンから退避してきました。彼らの多くはキーウに留まることを選びました。私たちの劇場は彼らにも舞台を使う機会を提供しました。10月には彼らと協働してドキュメンタリー作品『Staying is［Not］Possible...（Lyshatysja［Ne］Mozhna...）』を上演しました。この作品はハルキウの劇場で働く人々の実話に基づいたものです。本当に、彼らとつくったこの舞台は連日溢れんばかりの大入りでした。

私は常々、俳優同士の“連帯感”を夢見ていました。演劇人たちが、我々特有の嫉妬やライバル心を振り捨てて誠実な友人同士になることです。戦時下で突然、それが実現しました。私自身にとってこの経験はとても大切で意味のあることでした。

『Staying is［Not］Possible...』　撮影：Alexandr Kniga

私たちの作品と私たちの未来

戦争という出来事に対する私たちの当座の対応は、新しいウクライナ戯曲のリーディングを行うことでした。現在の戦争を描いた作品を本格的に上演するためには、時間が必要だったのです。ある程度の距離を取ることで、つらい思いを和らげる必要がありました。

そういった意味で、私たちの新作公演、アイルランド人劇作家ブライアン・フリールの戯曲

を原作にした『トランスレーションズ（Translations）』（2022年10月7日初日）は、より意義深い、ウクライナの現状への意志表明になると信じています。私は2年前からこの作品に取り組んでいて、ずっとこの作品ついて考えてきました。だからたった2か月でこの作品を舞台にかけることができたのです。実際、この芝居は今ウクライナで起きている事態を鏡のように完全に映し出しています。『トランスレーションズ』はほどなく新たな古典劇になるでしょう。これは重要なことです。なぜならこの作品は「場当たり的に」つくられたものではないからです。ウクライナ語で上演する私たちの『Pereklady（ペレクレディ）』（ウクライナ語で『トランスレーションズ』の意）は、すでにもう私たちの戦争についての作品であり、また戦争に至ったさまざまな理由についての作品なのです。

ロシア作品の上演を再開させるかですか？　それは今提起するにはまったく不適切な問いです。劇場から7人のメンバーが前線に赴いて戦っている最中です。多くの家族に死者も出ています。従業員のうち2名が契約を交わして領土防衛の任についてもいます。仕事の休憩時間には、女性従業員たちが劇場のカフェテリアで前線で使用するカモフラージュ・ネットを縫っています。ノーです。今はロシア文化について論じあう時ではありません。

現在のレパートリーは、ウクライナの古典作品により重きを置いています。当劇場の芸術監督ミハイル・レズニコーヴィチ（Mikhail Reznikovich）は今、ウクライナ人劇作家オルハ・コブリャンスカ（Olha Kobylyanska）の悲劇的小説『日曜の朝早く、彼女は薬草を摘んだ（V Nedilyu Rano Zillja Kopala）』の舞台化に取り組んでいます。また、私は戦争で中断してしまっているジェズ・バターワース『フェリーマン』を上演したいとも考えています。

私たちだけでなく、全ウクライナの劇場が直面している問題が予算の削減で、資金繰りの悪化は避けることができない状況です。この年末までに劇場の予算は10％減らされ、2023年にはさらに20％カットされることになっています。これは非常に深刻な問題です。しかし私たちはキャストも技術スタッフも含む、このチームの全員を守る努力をしてきましたし、これからも守り続けます。こんな苦難の中で仲間を見捨てることはできません。

『トランスレーションズ』　撮影：Iryna Somova

本当に、2月24日以降何もかもが変わってしまいました。もはや劇場は長期的戦略など立てられません。正直に言って、そんなものは一切ありません。そういったことに割くエネルギーも時間もないのです。一日一日をやりすごし、せいぜい半年先のことしか想像できません。いま考えられるのはそれだけなのです。

私たちは作品をウクライナ語に翻訳し続けなければなりません。膨大な作業です。ウクライナは2019年時点で「国家語としてのウクライナ語の機能保障法」を採択し、以降、ロシア語での上演にはウクライナ語の字幕をつけることが義務づけられています。ですからもう長い間この問題に取り組んできているのです。私たちの劇場では観客にヘッドホンをつけてもらい、字幕の代わりにウクライナ語への同時通訳を提供することも決めました。

2月26日には劇場の全従業員と連絡をとるためにTelegramでグループをつくりました。私たちチームのほぼ全員、およそ300名がこのグループのメンバーです。「ロシア」という語を、劇場名から削除することにはみんなすぐに賛同しました。また俳優たちはウクライナ語で演じる決断をしました。これが彼らの姿勢だったのです。

開戦時、私たちの劇場には約60のレパートリーがありました。戦争が始まって7か月が経った現在、そのうちの29作品はウクライナ語で上演されています。職業人生のすべてをロシア語で演じてきた俳優たちにとってこれがいかに大変な仕事か、舞台関係者であればだれでもわかるはずです。それでも私たちはやり遂げるのです!

戦禍を逃れ続ける劇場

ルハンスク州アカデミック・ウクライナ・音楽ドラマ劇場
Luhansk Regional Academic Ukrainian Music and Drama Theater
ルハンスク市／セヴェロドネツク市／スーミ市
http://ukrlugteatr.com

ルハンスク市はウクライナの最東部の中心都市で、ロシアとの国境から60㎞という位置にある。そのため住民の大半はロシア語を話す。

この劇場は、第二次世界大戦中の1941年8月、ウクライナ東北部のハルキウ市で劇団として創設された。ソ連軍の部隊や病院を慰問するためにつくられたのだ。

1944年にウクライナの領土がドイツの侵略から解放された後、劇場は疎開先からウクライナ東部の都市、ルハンスク市に帰還し、音楽と演劇を上演するウクライナの地域劇場として活動を開始した（以下、ルハンスク劇場という）。

2014年12月、ロシア軍によるウクライナ東部での対テロリズム作戦のせいで、ルハンスク

劇場は一時的にロシアに占領されたルハンスク市からウクライナ当局統治下のセヴェロドネツクに移転せざるを得なくなった。

劇場のメンバーの多くはルハンスクに留まり、新たな拠点にたどり着いたのは劇場監督と、経理担当者、俳優の3名だけだった。彼らは新天地で本格的な公演を行うため、できるだけ短期間でチームを再組織しなければならなかった。

ところが、その8年後の2022年3月、ルハンスク劇場はまたしても戦禍から逃れる羽目に陥った。2022年6月、セヴェロドネツク市がロシアの部隊に占拠されたのだ。

セルヒイ・ドロフィーヴ
Serhiy Dorofeev

ルハンスク州アカデミック・ウクライナ・音楽ドラマ劇場前劇場監督・芸術監督（2015～2022）

取材日＝2022年10月9日

ルハンスクからセヴェロドネツクへ

私たちの劇場はウクライナ語で上演活動をしてきました。ロシア語話者地域ではあったものの、本来の地元ルハンスクでは観客にとても愛されていたものです。私たちの公演がルハンスクの他の劇場より優れていて、面白かったからです。

劇場がセヴェロドネツク市へ移転し、私が監督に就任した2015年、劇場メンバーは10人足らずでした。私たちは新拠点でゼロからルハンスク劇場を再生しなくてはなりませんでした。

2015年には劇場に活動場所が与えられ、ルハンスクを去りウクライナ全土に散り散りになってしまっていた劇場の俳優たちも再結集し始めました。チームを拡充するため、数々の芸術系大学の学生も招き入れました。彼らの中には私たちの劇場が最初の職場となった者たちもいます。

こうして2016年には劇場のレパートリーは12にも達していました。同じ年に、地元行政当局は、私たちに与えられたこの古い建物の大規模な改修を行うことを決定しました。2017年、私たちは立派な設備が整った舞台を手に入れました。このとき私たち劇場のメンバーは、再び自分たちの“家”ができたと思いました。

私たちはウクライナ政府統治部分のルハンスク州では唯一の劇場だったので、地元住

民の多種多様なニーズに対応しなければなりませんでした。だから大人向けの演目も子ども向けの演目も上演しました。わかりやすくかつ観客に愛されている古典作品、ミュージカル、娯楽作品、現代劇などをです。当時、メンバーの平均年齢が25歳と非常に若かったので、若いウクライナ人演出家や劇作家も招きました。実験的な現代劇を観客に見せようとしたのです。

セヴェロドネツク市が決して演劇的な場所ではなかったことは言っておかねばなりません。大きな化学工場のある小さな工業都市です。だから観衆もはじめ我々に不信の目を向けてさえいました。ウクライナ語で演じられる演劇を見慣れていなかったからです。しかし時が経つにつれて、観客はほんとうに私たちを好きになってくれました。観客が増え、ファンもできました。我々は何とかこの町の「流れを変える」ことができたのです。

そう、私は劇場に課せられている責務を明確に意識していました。地域にウクライナ文化を根付かせることです。こうした文化振興のため、2018年には私たちの劇場が中心となってウクライナ中の素晴らしい舞台作品を招聘し、自前の演劇祭をスタートさせました。楽しく素敵な活動ができた濃密な8年間でした。

2022年、劇場はまたしても避難を迫られます。私たちはまた本拠地を、劇場を、そしてせっかく絆を築き上げてきたセヴェロドネツク市を去らねばならなくなったのです。

2月24日

2月24日、ルハンスク州の全住民に避難要請が出ました。行政当局は劇場スタッフに脱出準備をするよう通達してきました。私たちは荷造りを始めました。実際、2月24日にはセヴェロドネツクではもうミサイルの着弾する音、落下音、爆発音が聞こえていました。

こうした場合に備えて、我々は行動計画を用意していました。15分も経たぬうちに全メンバーに電話をかけました。避難準備ができている者、避難に支援が必要な者、自力で避難できる者、何があっても市内に残留する者と、あらかじめリストアップしてありました。もちろん、何もかも計画通りに進められたわけではありません。留まるはずだったものが真っ先に避難してしまったり、避難するはずだったものが長期間、市内に留まる事態に陥ったりなどということも起きました。

2月段階のセヴェロドネツクはカオスでした。混乱した群衆、延々と続く輸送の車列。でもそうした中でも、地域行政当局はウクライナ中部・西部への避難列車を、線路が爆破されてしまうまでの2週間以上は、定期的に運行できていました。初めの段階では鉄道の駅までの特別連絡バスも運行できていました。

思い出すのは、セヴェロドネツクから脱出する必要性をみんなに理解してもらうのがとても

難しかったということです。メンバーたちは劇場の地下に隠れて、爆撃や砲撃から身を守っていました。しかしそんな彼らでさえもなかなか脱出を決断しかねていました。なんとかなるはずだし、そもそもどこにも行くあてがない、と思っていたのです。しかし時間が経つと、大半は退去せざるを得なくなりました。

興味深い事実があります。2014年には元来の本拠地ルハンスクから、ウクライナが統治する領土へ脱出したのは、劇場メンバーの３分の１にすぎませんでした。残りの者はルハンスクにとどまり、いわゆるルハンスク人民共和国（LPR）の新政府を受け入れ、いま、ロシアの支配を受け入れています。そして今回、2022年には、若者の多い劇場メンバーの90％以上がセヴェロドネツクからウクライナ領土やヨーロッパに脱出しました。残留した５～８％はロシアによる支配を待望していた者たちです。こうした連中にはクリエイティブ系のスタッフは一人もいませんでした。現在、セヴェロドネツクには一人の俳優も残っていません。

2022年６月、ロシア部隊がセヴェロドネツクに侵入してくると、戦車が劇場の建物を直接狙って砲撃しました。捕虜になったドネツク人民共和国（DPR）のある兵士が、劇場内にウクライナ軍が潜んでいると思い込んだ司令部の命令で、10回にわたって劇場を砲撃した、と語っているビデオも存在します。しかし、兵士などいなかったのです。私自身が知っています。最後まで劇場内に留まって隠れていたメンバーと連絡を取っていましたから。ありがたいことに、負傷者は出ませんでした。しかし劇場は破壊されました。今は壁しか残っていません……。

破壊されたルハンスク劇場（セベロドネツク市）

さまよえる難民と化した劇場

避難を開始した当初、私は劇場メンバーの一部とともに、ドニプロ市に向かいました。ウクライナ東部の一大中心地でウクライナの主要な河川、ドニプロ川のほとりの町です。そこで私たちを受け入れてくれたドニプロ・アカデミック劇場（Dnipro Academic Drama and Comedy Theatre / https://dramicom.dp.ua）の舞台で活動を行いました。

2022年７月、私はウクライナ北部のシェプキン記念スーミ国立アカデミック・ドラマ・ミュージカル・コメディ劇場（M.S. Shchepkin Sumy National Academic Drama and Musical Comedy Theater / https://musicdrama.com.ua）の監督として迎え入れられました。同

時に、セヴェロドネツクで私の部下として８年間働いてくれたオレクサンドル・ハリシュコフ（Oleksandr Grishkov）がルハンスク劇場の監督に就任しました。

そして今、スーミ劇場の一つ屋根の下で、ルハンスク劇場とスーミ劇場という２つの劇場、２つの法人が、それぞれの劇団とレパートリーを持って共存しているわけです。

はじめはスーミ市の観客たちも驚いていました。なぜもう一つ劇場が必要なのか、と。しかし私たちの初公演は完売し、地元の演劇ファンに好評を博しました。スーミでもルハンスク劇場はうまく観客の心をとらえることができたのです。

８月には、この２つの劇場と２つの劇団が協力して、共同企画を組みました。ウクライナ独立記念日のためのミュージカル・パフォーマンス『意志。自由。勝利（Will. Freedom. Victory.）』を上演したのです。今ではこの公演はスーミ劇場のレパートリーに加わり、観客に大変好評です。

次の私たち２劇場の共同企画は、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』です。こちらはスーミ劇場のオーケストラの生演奏による大規模なミュージカル仕立てになる予定です。

『意志。自由。勝利。』

『ロミオとジュリエット』

安全を確保すること

開戦からの半年間は、スーミ劇場は稼働できませんでした。というのもスーミ州も部分的にロシア軍部隊に占拠され、町全体が包囲されていたからです。敵がウクライナ北部から追い散らされても、危険はなくなっていませんでした。劇場を運営するには、観客や劇場の従業員の安全確保が必要不可欠です。これが監督として私が解決しなくてはならなかった最初の課題でした。

劇場には地下室があり、スーミ市が包囲されている間、人々はそこに逃れて暮らしていました。私たちは技術的な必要に応じて、地下室の防備を再整備しました。地下室には150名が収容可能でした。劇場の隣にある国立ウクライナ銀行アカデミー（経済と法律の高等教育機関）にかけあって、我々の舞台上演中に空襲警報が発令された場合、我々の側の50名を彼らの耐爆シェルターに収容してもらうことで合意できました。こうして、より多くのチケットを販売することができ、800席のオーディトリウムに200人の観客を迎えて公演することができたのです。

『肺』

また、実験的なスペースも設営しました。いわばステージの下のステージで、回り舞台の真下の奈落に設営したのです。いざとなったらここはシェルターにもなります。ここですでに2つの室内劇を披露しました。ダンカン・マクミラン（Duncan Macmillan）の『肺（Lungs）』とウクライナの風刺作家でみんなが大好きなオスタプ・ヴィシュニヤ（Ostap Vyshnya）の原作を基にした『ボルシチ（Borsch）』です。

『ボルシチ』

ロシア人なしで生きていく

ロシア人の劇作者に関しては、古典であれ同時代作家であれ、ノーのひとことしかありません。セヴェロドネツクでも同じ原則を守っていました。ロシア人作家は、なしです。私はスーミでもこの原則を確立したいと思っています。たとえどんなに良い作品であっても、作者自身がウクライナに関して中立的立場をとっていても、同じことです。ノー、です。私個人にとっては、もう良いロシア人など存在しません。ペテルブルグからカムチャッカに至るロシア中に住む私の親族もそうです。私たちの立場は全く合致せず、別々の世界に生きているのです。

現在、私たちは劇場のレパートリーを増やしているところです。ルハンスク劇場、スーミ劇場双方の、かつての演目を復活させようとしているのです。ですが、俳優たちの多くがウクライナの別の町や国外で活動していて、装置も衣裳もセヴェロドネツクで焼きつくされてしまったので、とても困難な作業です。しかし、私はスーミ劇場と、3つの公演を行いました。もちろん小規模なものですが。また、子どもたちへプレゼントするための舞台もつくりました。カミーユ・サン=サーンスの作品をベースにした『動物の謝肉祭（Carnival of the Animals）』は、子どもたちが楽器演奏に親しみ、音楽の初歩的知識に触れられる作品です。このチケットはいつも完売です。新作の公演もすべて好調です。

しかし、セヴェロドネツクと同じく、スーミは小さな町です。周知の事実ですが、小さな町では“作品の命”が非常に短いものです。10回公演したら終わり、公演が「棚上げ」になることもあります。だから、戦争やウクライナの厳しい経済情勢下にあっても、仕事のペースを早めなければなりません。創作活動を続ければ、観客も劇場に来続けてくれるのです。

戦時における劇場は、観衆にとって必要不可欠な存在になりました。みんな家族や友達と分かりあい、支えあうために劇場に足を運びます。その思いに、私たちは応えなければならないのです。

ウクライナ人劇作家ナタリア・ボロズビトの『サーシャ、ゴミを出して』もレパートリーに入った。

銃後の劇場

イヴァノ=フランキウスク市イヴァン・フランコ記念国立アカデミック・ドラマ劇場

Ivan Franko National Academic Drama Theater in Ivano-Frankivsk

イヴァノ=フランキウスク市

http://www.dramteatr.if.ua/

この劇場があるのはイヴァノ=フランキウスク市だ。ウクライナ西部に位置し、カルパチア山脈北東部の山麓プリカルパティアに面している。市の名前、また劇場の名前は、傑出したウクライナ人作家であり詩人、文化人であったイヴァン・フランコ（1856～1916）にちなんだものだ。現在の戦線にあって、イヴァノ=フランキウスク市は後方深くに位置している。

劇場は、公式には1939年にウクライナ西部の複数の旅回りのアマチュア劇団をもとに組織され、旧ソ連時代のカルパチア地方における最初のウクライナ語で演じるプロ劇場となった。

ブリティッシュ・カウンシルのウェブサイト上には、以下のような記述がある。

「イヴァン・フランコ記念国立アカデミック・ドラマ劇場は2019年に創設80周年を迎えたが、若く精力的な劇団やスタッフを擁して、変革の意気に満ちている。この10年はロスチスラフ・デルジピルスキが芸術監督を務め、大ホールは900席、小ホールは50～150席を備えている。劇場のレパートリーは、あらゆる演目をバランスよく取り上げており、ウクライナで人気の現代小説を原作にしたものから衝撃的なオペラ『ハムレット』、フランス人演出家ジュール・オードリー（Jules Audry）によるアルベール・カミュの『カリギュラ』にまで及ぶ。

今後の上演予定作品としては、ソフォクレス、シェイクスピア、チェーホフなどが挙げられている。イヴァン・フランコ記念国立アカデミック・ドラマ劇場はたゆまず世界中との絆を深めており、米国、カナダ、イタリア、ポーランドでの海外公演も成し遂げている。現在は、国内外の作品を上演するウクライナ初のシェイクスピア・フェスティバルを展開中だ。

同劇場ではまたゴーゴリ・フェスト（Gogol Fest）と多ジャンルにまたがる作品を扱うポルト・フランコ（Porto Franko）の２つのフェスティバルを同時開催してもいる。経験豊富かつ多才な彼らは、国際共同製作やクリエイティブな交流も行っており、またツアーにも積極的に取り組んでいる」

（https://www.britishcouncil.org.ua/sites/default/files/theatre_profile_if_nadt.pdf）

ロスチスラフ・デルジピルスキ
Rostyslav Derzhypilsky

イヴァノ＝フランキウスク市
イヴァン・フランコ記念国立アカデミック・ドラマ劇場
劇場監督・芸術監督・俳優・演出家・プロデューサー

取材日＝2022年10月12日

ロシア抜きのレパートリー

2019年、私たちの劇場は「国立」という地位を与えられました。その時点から、私たちはウクライナ全土における演劇センターの一つとしての活動を、綿密に計画するようにしてきました。そのために国内でも最良の演出家たちを招聘しました。2022年にも数々のウクライナ国内外の演出家たちと契約を交わしました。

いつも劇場では古典と現代劇の両方を組み込んだレパートリーを企画していました。ロシア人作家もその中に含まれていました。アントン・チェーホフや現代劇作家の作品です。2022年３月12日と13日には、ドストエフスキーの小説『白痴』をもとにした作品を初演する予定でした。

私にとってはドストエフスキー作品を上演することは長年来の夢でした。しかしロシアによる全面的進攻が始まってしまった今、ロシア人作家の作品はすべてレパートリーから外されました。現状ではロシア人の作品の上演など問題外です。

２月24日

開戦後、特に戦禍の惨たらしさ、殺戮を知るにつれ、私のなかである問いが浮かびました。こんな中にあって劇場が存在する意味などあるのか?と。しかしこうした内的混乱は長くは続きませんでした。

文字通り、開戦のほんの数日後には、劇場のチームも私も、劇場を人道支援や物資供給の拠点に変え、ウクライナ軍の兵士たちや私たちの国の東部や南部からの避難民の援助に当たっていました。

俳優たちも物資供給の責を担いました。俳優の中には、ウクライナ国内外で広く知られているスターもいます。開戦の前は、彼らはヨーロッパ公演のプロジェクトに参加し、映画やテレビの企画で主演していました。ですから俳優たちや劇場チームは、人々から深く信頼されて

いたのです。

かなり以前に私たちの劇場を母体として設立された公的機関の口座には、世界中の国々から資金援助がすぐに届き始めました。わずか数日の間に、避難民のための医薬品や生活用品など、さまざまな人道的援助が集まりました。この任務は、劇場の従業員である、俳優のナディヤ・レフチェンコ（Nadiya Levchenko）イヴァン・ビンダル（Ivan Bindar）、そして主席振付家のドミトロ・レカ（Dmytro Leka）が中心になって行いました。彼らはほぼ全世界と連絡を取り合ったのです。

劇場の副支配人も、音響エンジニアほか、数名の技術スタッフも前線に赴きました。しかし俳優たちにはとどまってもらえるよう努力しました。俳優が代わってしまうと、これまで築いてきた劇団としてのシナジーを再構築するのがほぼ不可能になるからです。

舞台衣裳を縫っていた劇場の衣裳係は、軍のための物資を縫うようになりました。

キーウやハルキウ、ウクライナ東部、南部からの避難民が私たちの市にもやってきました。その一部はしばらくの間、私たちの劇場で暮らしていました。そこで俳優たちは、避難してきた子どもたちのためにカウンセリング・ルームのようなものを設けて、子どもたちが遊んだり、コミュニケーションをとったりして、時間を過ごせるようにしました。

劇場が劇場以上の存在になる時

私たちは速やかに劇場本来の活動を再開しました。それは、次のような理由からでした。

数年前、私たちは劇場の広い地下室にステージを設置して、そこでシェイクスピアの『ハムレット』や『ロミオとジュリエット』を上演しました。この地下室が空襲中の耐爆シェルターとして役立つことになりました。

空襲があると、避難民を含む多くの人々が劇場にやってきました。正直に言って、この光景はとてもつらいものでした。みんな心理的なトラウマを抱えていたからです。中には妊婦や、幼児を連れた女性、ペットを抱えた人々もいました。みんな空襲に怯えきっていて、体調を崩していました。だから最初の数日間は、劇場の従業

『ハムレット』

員たち全員がみんなのそばへ行き、セラピストのように心を落ち着かせるよう努めました。

そんな中、こんな考えが脳裏に浮かんだのです。私たちも思い切って、自分たちが一番得意なことをやってみたらどうだろう、とね。

『ロミオとジュリエット』

この人たちのためにどんな作品を上演すべきなのかわかりませんでした。喜劇……恐怖と暴力を目の当たりにした人々に?悲劇……そこらじゅうに悲劇があふれかえっているときに?

しかし私たちはリスクをとって、3月初旬には開戦以来、初めての公演を行いました。上演したのはウクライナ人作家イヴァン・コトリャレウシキー(Ivan Kotlyarevskyi)のバーレスク滑稽詩『エネイーダ(Aeneid)』に基づいた作品でした。『エネイーダ』は、1789年に近代ウクライナ語で出版された最初の文学作品です。それからウクライナへ例を見ない支援をしてくれているイギリス国民への感謝をこめて『ハムレット』を上演しました。さらにウクライナ人現代作家マリア・マチオス(Maria Matios)の作品をベースにした『祖国(Nation)』を上演しました。

この状況で、演劇が人々に必要なのかという懸念は、観客の一人が劇場のSNSへ書き込んだ投稿を読んで消え失せました。ブチャから逃げ延びてきたある女性はこう書いてくれています。

「戦争がやって来て爆撃が始まると、私は家族を、子どもたちを連れて、地下室にみんなで隠れていました。私は泣きませんでした。わかっていたのです。私には泣き叫ぶ権利などもうない。強さと冷静さを保って、家族を守る責任が私にはあるのだから。ロケット弾で外の、路上のすべてが破壊され、地上に上がるのも怖くて地下室に1週間座っていた時も、私は泣きませんでした。家族のために食べ物と水をまかない、暖かい場所を確保しなければならないとわかっていたから。もう逃避しなければならないと悟ったとき、みんなを集めて爆撃の中、町を去りました。でも私は泣きませんでした。わかっていたからです。家族を守る責任は私にあり、動揺する権利などないと。イヴァノ=フランキウスクにたどり着いても、家族と子供の住む場所を確保するために数々の難題に対処しなければなりませんでした。それでも私は泣きませんでした。

でもある日、また空襲の中、私はイヴァン・フランコ劇場の舞台を観に行ったのです。そして、演出家や俳優たちが舞台に出てきて、演技を始めるその最初のセリフから劇が終わる最

『エネイーダ』は開戦前の2021年8月22日にはピップ・イヴァンの山頂で上演された。

『祖国』　撮影：Bohdan Savliuk

後の一音まで、涙があふれて、上演中ずっと泣いていました。そうしたら、気持ちが楽になったんです。自分を取り巻く世界が見えてきて、だんだんとどう振る舞うべきか、家族のためにどう生きていけばいいのかがわかってきました。それから一度も公演を見逃すことはありませんでした」

こうした言葉の数々に心を揺さぶられました。私たちはあらためて演劇は力強い癒しになりうることを自覚したのです。芸術には専門家でもできないことができるのです。もちろん傷ついた人々は心理学者やセラピストのところに行って「私は治療が受けたい」と訴えるべきです。そして専門家は一人ひとりに適切な対応を見つけなければなりません。しかし劇場に行けば、人々は無意識のうちに自分のトラウマを「乗り越える」ことができます。何千年もの間、劇場に足を運ぶ観客たちが経験したのと同じカタルシスを得て、心が洗われ、違う自分になって帰っていくことができるのです。

それから私たちは「耐爆シェルターの中の劇場」というプロジェクトを始め、3月いっぱい劇場の地下室で公演を続けました。こうして私たちは――私の知りうるかぎりですが――ウクライナで唯一、開戦後も活動を止めなかった劇場となったのです。

面白いのは、私たちがシェルターの中でも大規模な上演を行えたことです。当初はこうした地下シェルターでいったいどんな舞台ができるのか、思いもよりませんでした。早くも2022年4月時点で、私たちは通常の上演形態に切り換えました。私たちの劇場には5つの劇場

スペースがあります。空襲警報が鳴ると、上演を中断します（現在もそういった状況です）。俳優も観客も全員が耐爆シェルターに入り、警報が止むのを待って、みんなで劇場へ戻って上演を再開して終わりまで続けるのです。

人々は劇場地下の耐爆シェルターでの公演に集まった。
撮影：Bohdan Savliuk

戦時になにを上演すべきか、戦争がテーマの作品を上演すべきか？

開戦からの半年間は、私は本も読めず、映画や演劇もまともに見ることができませんでした。しかし劇場は前へ進まなければならないということ、そして私たち演劇人は現在起きている現実に応答しなければならないことは自覚していました。

どんなテーマの作品を上演すればいいのか？　私たちは劇場の仲間や演劇研究者の友人たちと議論を重ね、結論として、こんな時代にはポスタースタイル、つまりストレートにメッセージを伝えるものが有効だと気づきました。私が愛していたチェーホフ作品の微妙な感情の機微、ドストエフスキーのような心理劇は、戦時下では通用しません。世界が白と黒に描き分けられてしまったからです。こんな時にはプロパガンダポスターのような、はっきりとした表現が適しているのです。

そのころ私たちの劇場には現代オペラの分野で活躍する高名なウクライナ人作曲家、ローマン・フリホリエフ（Roman Grigoriev）とイリヤ・ロズミーコ（Ilya Rozumiyko）がいました。ローマンはウクライナ国立大統領交響楽団（Presidential National Orchestra）の一員でもあります。私たちは大統領交響楽団との共同プロジェクトを行うことを思いつきました。彼らの楽団員（50名以上の音楽家がステージに立ちます）と私たちの俳優、私の演出で、私たちはポスタースタイルのコンサート形式による作品『ウクライナのための戦い（Fight for Ukraine）』をつくりました。ウクライナや世界各国の宗教音楽、ウクライナの偉大な古典であるタラス・シェフチェンコ（Taras Shevchenko）やヴァシル・ステファニカ（Vasyl Stefanyk）の詩、そしてウクライナ軍歌を織り交ぜた舞台です。

この作品では、ウクライナのアイデンティティを語り、過去数世紀にわたりいかにロシアが私たちのウクライナを破壊してきたかを語りました。舞台からは“政治的に正しくない”かなりきわどい言葉も聞こえてきます。しかし、私たちにとっても観客にとっても、こうしたことが必要だったのだと気づかされました。地元西ウクライナの人々にとっても、そして最も興味深いのは、ウク

『ウクライナのための戦い』

ライナ東部、南部から避難してきた人々にとっても必要だったのです。彼らの中にはウクライナ人としての魂が既に芽吹いていました。私たちには、彼らが自分をウクライナ人であると実感することが必要不可欠であることが見て取れました。ロシアの影響がとても強い東部でも、今人々はあえてウクライナ人たることを選び取っています。これもまたとても素晴らしいことです。私たちの眼前で祖国ウクライナが創生されているのです。

私は現代の戦争を扱った現代劇については慎重になっています。ウクライナやヨーロッパで、ウクライナの劇作家の作品のリーディングが盛んに行われていることや、ドキュメンタリー演劇もかなり一般的になってきていることは知っています。しかし、今ここで起きていることを、少し距離を置いて観られるようになるには、まだ時間が必要だと思うのです。今はさまざまな出来事を痛みとともに振り返ることしかできませんが、演劇という芸術にはもっと繊細な理解と芸術的一般化が必要だからです。

欧米諸国ではこうした軍事的な出来事に我々がどう反応するのか、みんなが大きな関心を寄せています。ただ私がとても危惧するのは、ウクライナの芸術や演劇が戦争一色になってはいけない、被害者が陥りがちな罠にはまって、泣いたり嘆いたりしてばかりではいけないということです。私たちは、高い芸術的水準を保たねばなりません。

今後の計画とウクライナ

劇場のレパートリーにはウクライナの古典劇ももちろんあります。しかしたまたま私は演出家としてウクライナの古典戯曲を上演したことがありません。だからこそ古典作品を演出したいのですが、従来の古典的なやり方ではなく、現代的な視点から再解釈を行うつもりです。

今、フリホリー・クヴィトカ・オスノヴィヤネンコ（Hryhoriy Kvitka-Osnovyanenko）の『ソローチンツィの定期市（Sorochintsy Fair）』やレーシャ・ウクラインカ（Lesya Ukrainka）の『森の歌（The Forest Song）』など、ウクライナ人劇作家の作品を新作上演することを計画しています。またコメディは必ず上演します！　喜劇をやることを恐れる必要はありません。信じてください。私たちは祖国を癒す必要があり、演劇には強い癒しの力があることが証明されています。今、これらの作品の稽古中で、新作公演はこの10月下旬から11月に予定しています。残念ですが、これ以上のことはまだお話しできません。

《インタビューを終えて》　マリーナ・コテレネツ

インタビューを行ってから5か月が過ぎた。戦争が続いた5か月だった。この間、ウクライナの劇場は、国全体が、そしてすべてのウクライナ人がしなければならなかったことをしていた。一方では軍事作戦を展開し、もう一方では命と命に関わるすべてのものを守ることだ。

劇場は可能な限り仕事を再開し、過去の公演を復活させ、さらに新作の準備をしようとした。もちろんこの時期、国内の多くの舞台で戦争をテーマにした公演が行われた。しかし観客は予想通り、「軽い」演目を好んだ。レパートリーの中でも、喜劇、メロドラマ、推理ものは、従来、興行収入が高い。戦時下では、この傾向は一層強くなった。突如としてオーケストラやクラシックのアンサンブルによるコンサートが大きな人気を集めることになったのだ。劇場の建物や町全体がいつ停電になってもおかしくないため、公演の多くは抵抗の印としてろうそくの灯りのもとで行われ、光や電気を使わないことがこの上なく繊細で美的な意志の表明になっている。

しかし、現在の最も重要な動向は、ウクライナの若い劇作家たちが驚くべき活動を行い、戦争の衝撃に対して鋭く、激しく反応していることだ。

今、世界中で私たちウクライナの作家たちにかつてないほどの関心が集まっている。ヨーロッパ各国やアメリカで、ウクライナの劇作家や俳優によるリーディングや公演、フェスティバルが開催されている。フランスやアメリカでは彼らの新作戯曲集も刊行されている。

ウクライナの劇作家の書いたテキストは、多くの点でジャーナリスティックであり、ドキュメンタリーである。それはウクライナの人々の今の生活、普通の人々の経験や試練の記録のようなものだ。その歴史的価値は否定できないが、芸術的な成果が認められるのははまだこれからだ。

現時点では、ウクライナ人による戯曲のなかで世界的に最も知られるようになったのは、ナタリア・ボロズビトの『Bad Roads』だろう。ボロズビトがこの作品を書いたのは2017年、テーマは2014年に始まったウクライナ東部の戦争だ。戦争は、ずっと前から始まっていたのだ。

Kotelenets, Marina

国立キエフ・イヴァン・カルペンコ＝カリー記念演劇・映画・テレビ大学（Kyiv National I. K. Karpenko-Karyi University of Theatre, Cinema and Television）演劇学科（学士）、国立キエフ・タラス・シェフチェンコ記念大学（Taras Shevchenko National University of Kyiv）心理学科（修士）を卒業。ウクライナの出版媒体で美術評論家やジャーナリストとして活躍した後、母校のイワン・カルペンコ＝カリー大学の演劇学科で教鞭をとる。2011年からは、NPO「全ウクライナ作家連盟（All-Ukrainian League of Authors）」で、劇場や劇作家との協働に関する専門家として勤務。2016年より全ウクライナ作家連盟のディレクターを務める。

（翻訳：中森拓也）